

「研究ノート」

『利根川図志』・「関宿伝記」にみる関宿の地理・伝説・怪異譚

松丸明弘

はじめに

現代は高齢社会と言われ、全人口の四分の一が六〇歳以上の年齢層で占められている。彼らの中には、定年退職後の余暇として、自らが住居を構えて暮らしている地域の歴史を学ぼうとする者が多い。歴史散歩ブームと言われ、そうした見どころを掲載したタウン情報誌や地域史啓蒙書と言った類が本屋の書棚に並び、また各地の博物館や社会教育施設でも、様々な歴史散歩のイベントが行われている。

しかし、地域の見どころを紹介した書物は、例えば鈴木牧之の『北越雪譜』や斎藤月岑・長谷川雪旦の『江戸名所図会』など近世から近代にかけて人気を博したものがある。人々が地域を知ろうとする思いは、今に始まったことではない。

これらの書物の内容を具体的にいえば、一地方についての歴史・沿革、地名、山野河海などの地理的環境、史跡、民衆の間に広まっていた伝説や習俗、神社や仏寺まで記録したものとと言える。一般に

「地誌」と名付けられているが、地理で学ぶ「地誌」に比較してその叙述対象は実に幅広い。

本稿では関宿（千葉県野田市）について書かれた地誌関係の史料から、今まで歴史中心に明らかにされてきたもの以外で、地理的な分野や民俗的な分野に関わる史料を拾い紹介する。特に取り上げられなかった伝説や怪異譚などに重点を置いて紹介したい。

一 『利根川図志』と関宿の地理的状况

『利根川図志』⁴は、安政五（一八五八）年三月に初版本が出版されている。下総国布川（茨城県北相馬郡利根町）の医師であった赤松宗旦の著作である。六巻からなり、安政二（一八五五）年の自序がある。赤松宗旦の家は、民俗学の祖である柳田国男が松岡姓で布川に暮らしていた頃よりも前から、松岡家と縁があったことで知られる。実はこの『利根川図志』を昭和十三年に岩波書店より刊行し、世に広めたのは、柳田国男である。岩波文庫『利根川図志』にある柳田国男の解題によれば、著者の赤松宗旦は文化三（一八〇六）年

生まれで、名は義知、宗旦は通称であり、天保九（一八三八）年に布川に移り住んだとしている。従って、赤松宗旦が『利根川図志』の自序を書いた安政二年には五〇歳を迎えていたことになる。

まず、関宿周辺の地理的状况をおさえておきたい。『利根川図志』のはじめに利根川全図と称された河川図が掲載されている。安政期（一八五四〜一八六〇）の関宿付近の様子を記したものが、図1である。『利根川図志』には関宿の西を流れる江戸川、東を流れる中利根川、北を流れる逆川が記され、また、さらに赤堀川、権現堂川が記されている。

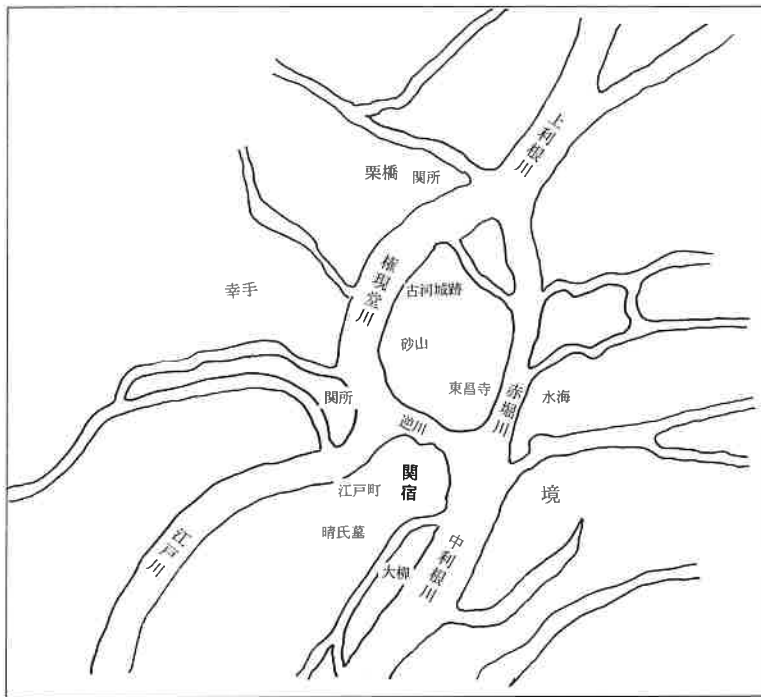


図1 安政期（1854～1869）の関宿周辺
（『利根川図志』巻1より作成）

関宿の北部には川に囲まれた島があったことがわかる。しかもそれは東西を流れる小河川によってさらに二島に分かれている。それほどばかりでなく、当時の関宿一帯は北から権現堂川、赤堀川が流れ込み、その流れが、利根川と江戸川に分流するという地形上の特色の中で、湿地帯の様相を呈していた。上記の四つの河川以外にも小河川がいくつも流れ込んでいる様子もわかる。また、銚子（千葉県銚子市）、日光（栃木県日光市）、倉賀野（群馬県高崎市）などからの舟運の通過点としても重要な場所であった。河川図に関所が記されている。舟役所とも呼ばれ、河川を利用して江戸に荷を運ぶ船を改めるために置かれた関所である。

さらには関宿には「ボウダシ」と呼ばれる人工の水量調節装置があったことが知られているが、この『利根川図志』にはそれが描かれていない。権現堂川の方が赤堀川よりも水量が多く、水は権現堂川から江戸川に流れ込むのが自然の流れであった。江戸川の方が利根川より河床が低い。「ボウダシ」を設ける狙いは、江戸川に流れ込む水量を調節して、逆川から利根川に水を流そうというものであった。従って、逆川の水流は西から東となる。逆川の語源はそこにある。一見すると逆に流れていくようにみえるからである。江戸へ向かうために利根川を上る船はこの逆川で流れに抗して江戸川に入る必要があった。逆川の流れは勢いがあり、帆の風力だけでは難しい場合もあり、船を綱で引くために雇われた人夫の存在も知られている。

図1の島の南側には「東昌寺」が記されている。現在の茨城県猿島郡五霞町山王山にあり、築田満助の菩提寺として有名である。また関宿の南東部には砂州が発達していることがわかる。関宿のすぐ南側には、「晴氏朝臣墓」と記されている。逆川、権現堂川、赤堀川の三河川に囲まれた一帯は砂州というよりも島になっている。「東昌寺」とともに島の北部には「古河城跡」と記入されている。また島の西側には「砂山トヨブ」として山の記号が記されている。

また現在、利根川を、上利根川、中利根川、下利根川と分けて用

いることが多い。しかし具体的にどこまでが上利根川で、どこからが下利根川かといった問題について、曖昧な部分がある。この『利根川図志』では、権現堂川と赤堀川の合流点より上流を上利根川、江戸川と利根川が逆川を介して合流する地点より絹川と利根川の合流地点までを中利根川、それより下流を下利根川とそれぞれ上中下の利根川に分けて河川図を作成している。布佐（千葉県我孫子市）と布川（茨城県取手市）を結ぶ付近に「下利根川」と記入されているが、範囲はここからが下利根川であるというほどの厳密な意味ではないようである。現在の鬼怒川は絹川、現在の小貝川は蠶養川と記されている。「蠶養」とはカイコを育てるという意味で、本文中に「こかい」と振り仮名をつけている。河川の名称も時代ごとの変化がある。

二 『利根川図志』にみる関宿

河川図の紹介にあとに『利根川図志』巻二の「関宿城」をみると、この城は、古河公方の臣築田氏の築くところなり、築田は従来、下野の國人にて今も下野に梁田郡梁田村あり、世々鎌倉公方につかへたり、（以下略）

からはじまり、戦国時代から近世に至り、安永期（一七七二〜一七八二）頃までの政治史が記されている。

また、関宿の繁栄について紹介した一文のあと、東に臺町、南に江戸町、内河岸、元町、内町あり、内河岸の対岸は向河岸なり、この二所、問屋船宿多く、最も繁華なり、江戸へ行く旅人舟は向河岸より出づ、江楼に柳樽を開き江岸に柳枝を折る、その景況、喩ふる物なし、

として、当時の繁栄を記している。次に紹介されているのは、古河晴氏の墓である。

宗栄寺の後ろの園中にあり、高さ五尺ばかり、土人あざなして御所卵塔という、とある。

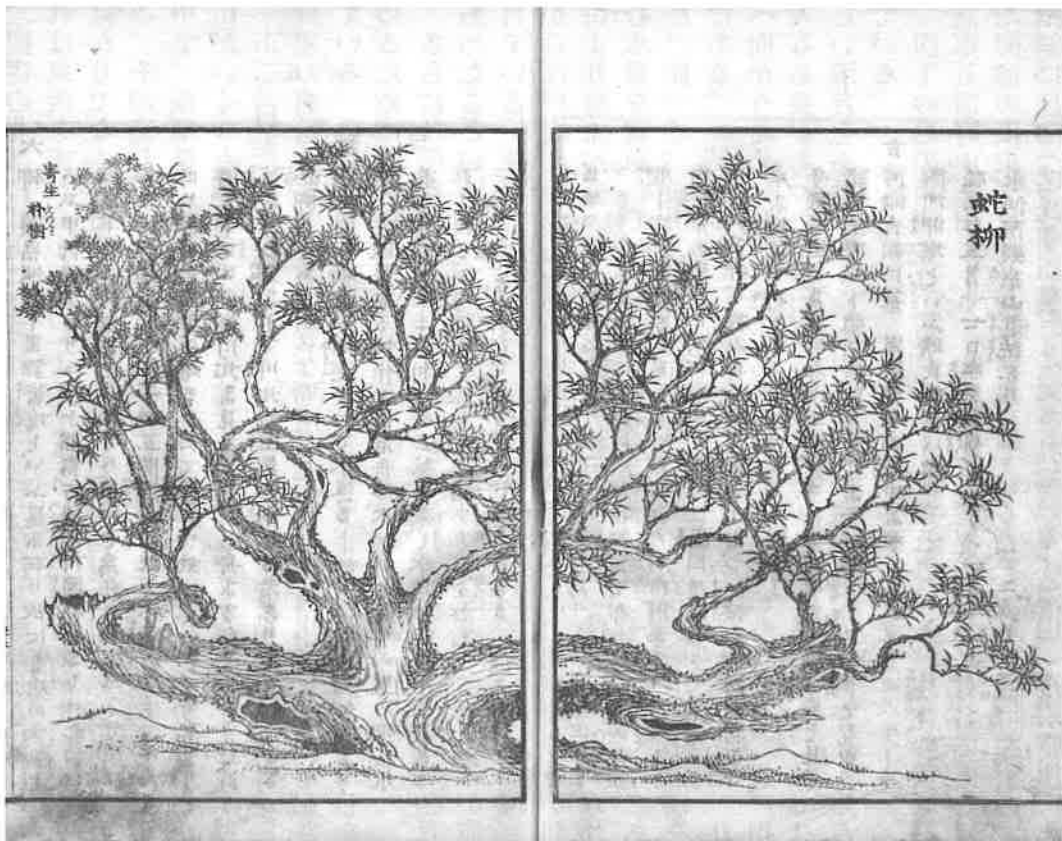


図2 関宿の大柳（『利根川図志』千葉県立関宿城博物館所蔵より）

続いて、大柳の紹介。巻頭の河川図にもその場所が記されている。関宿東岸が大きな砂州になっており、その部分に「大柳」と記されている。『利根川図志』にも大きく絵が描かれており、蛇柳（じややなぎ）と書かれている。紹介文は、以下のようである。

関宿城東半里ばかり葦場というところあり、故に葦場の大柳といふ、……（中略）……一奇事あり、時としてこの柳、川北に見えて夜行の舟に方向を失わしむ、此蓋し蜃楼の類にして川北の空気に映ずる者なり、是を以てまた妖柳という。

図2がその大柳である。関宿の東部の葦場（「よしづば」とルビあり）に大柳がある。川船がこの近くを航行するときに、この大柳が川の北の方角になぜか見えるために方角を見失ってしまうという。妖柳に「げげやなぎ」と振り仮名がつけられている。宗旦はこの現象について「蜃楼」、つまり蜃気楼のことであると科学的な分析をしている。なお、天野昭子氏によれば、この大柳は河川敷拡張のために切られたが、村人はその枝に挿し木をして育て、工事のあるたびにまた切つては挿し木をするという行為を繰り返して、現在は下谷中「大柳大龍権現神社」のご神木となっているという。下谷中とは関宿の台町の地区名である。今大柳神社境内に残る柳は「孫柳」として神格化され、社殿も立派に建立されている。

最後に「掘割」として、

関宿のあたりは卑湿にして、水患多し故に嘉永のはじめ、領主より命じて、城東なる桐ヶ作、木間ヶ瀬、舟形、木崎等の村々、六里の間に水道を作り、水堀より利根川に落とし、永く水患無からしむ、民は甚だこれに頼る、この桐ヶ作に眼科医鳳悟あり、書を好む。

とある。「掘割」として六里（約二四km）の用水路を通したことが記されている。また、鳳悟という桐ヶ作（千葉県野田市）の眼科医とは、高野敬仲のことである。三代目の敬仲（椿寿ともいい、雅号が鳳悟）のことで布川の医師であった赤松宗旦と親交があった。高野敬仲の名は四代続き、その三代目である。三代目敬仲（椿寿）の

時期が医家として最盛期であり、椿寿の子石寿は、取手に支店を開いている。そして桐ヶ作と取手（茨城県取手市）の間で連絡を取りあいながら活動範囲を大きく広げている。関宿と取手は双方ともに河岸が発達した場所であり、患者の移動・薬の入手・処方に関する相談が活発に行われたことが高野家文書から読み取ることができ

三 「関宿伝記」にみる関宿

「関宿伝記」の著者の今泉政隣は、関宿藩士で、安永九（一七八〇）年二月に序文を書いている。構成的には若干のまとまりを欠いているように見受けられるが、関宿の神社仏閣、築田家の歴史、関宿城の様子などを知ることができる。巻末の識文をみると、一〇年後に「杏花園」という人物が寛政五（一七九三）年に書写したと記されている。「杏花園」とは、太田南畝であろう。太田南畝は狂歌・洒落本・黄表紙の作者として著名な人物で、蜀山人または杏花園と号したことで知られる。そして、さらに嘉永四（一八五二）年に「懿」とあり、関宿藩士船橋随庵が書写したことが記されている。

この「関宿伝記」を冒頭から概観しながら、本稿の趣旨に合う部分を抜きだしながら紹介したい。

本書はまず「関宿城主の次第」から始まって、長禄元（一四五七）年に関宿城を築いたとされる築田成助から安永三（一七七四）年の久世廣明の治世までを記して終わっている。この意味で今泉政隣がこの「関宿城主の次第」を叙述していたのは安永三年であったと言

うこともできる。この一連の城主交代史の中で、

明和七年寅年より関宿御預り
十一万石 掘田相模守 下総国佐倉城主

安永三年八月十三日 復賜関宿城主

とあり、一時期、佐倉藩主の堀田家の御預かりになっていたことが興味深い。

続いて、「関宿合戦之次第」として、関宿城についての伝説が記されている。文明九（一四七七）年七月、上杉宣政の軍勢が市川の城より押し寄せてきたが寄せ付けなかった。次に明応二（一四九三）年にも八日に及ぶ合戦でも寄せ手を打ち負かしたとして、

此城、川向こう大六天神の社あり、此城敵向へば、敗軍の節、かならず光り物飛来ると申し伝ふる也、²²

と、戦いを勝利に導いた「光り物」の存在が記されている。

続いて、しばらく関宿の歴史についての叙述が続いたあと、近世に移り、関宿領主となった松平因幡守康元の子である松平甲斐守忠良の逸話が掲載されている。

松平甲斐守忠良

因幡守康元の御子也、忠良生得短気ニテ、御爪ノバシタルコトヲ鼻ニカケ、奢侈専ラニシテ、御領私領ノ分カチナク、鷹狩川狩等ヲホシイママニシ、傍若無人隣国ノ大名モモテアグミ、百姓町人難義ニ及ブコト、²³勝テ云難シ、百姓共セン方ナク、御代官伊奈半十郎へ歎キ訴フ、

として、やがて半十郎により忠良の支配下である関宿の領民がお咎めを受けることになった。そのことを根にもち、半十郎を恨んでいた忠良は、ある時、殿中にて言い争いとなった。そして忠良は、半十郎に斬りかかる。

脇差ヲ抜討ニ切ラレケルカ、半十郎ガ膝ニ当ル、諸人驚テ大勢立寄、双方ヘ引分ル、半十郎堪忍セズ、是非討果スベシト存ズレド、殿中ヲ恐レ候間、御城外ニ於テ勝負スベシト……（後略）²⁴

ほぼ同じことが、元禄十四（一七〇一）年に浅野家と吉良家の間で起こったことは、忠臣蔵としてあまりにも有名である。結果、浅野内匠守長矩は切腹、浅野家五万三千石はお取りつぶしとなり、やがて赤穂浪士の討ち入りとなる。

この事件ではどのような結末となったのか。松平忠良の父である松平康元は、実は徳川家にとって特別な人物であった。母が水野右衛門大夫忠政の娘、つまり於大の方であり、家康の生母である。於大の方は最初、家康の父である松平広忠と結婚したが、広忠が今川氏と結び、水野氏が織田氏と結び、対立を強めたために離婚する。後に尾張久松家に嫁ぎ、松平康元を産んだことになる。つまり、家康の弟（異父弟）ということになる。「松平」という姓と康元の「康」の字は家康からいただいたものである。天正十八（一五九〇）年に関宿城を拝領している。その後、慶長八（一六〇八）年、父康元の死去にともない、関宿城の城主となった。²⁵話を戻し、この喧嘩の子細については、

家光公、半十郎ヲ御前へ召サレ、忝モ此ノ赴キヲ尋有テ、其方ガ立腹至極ナリ、甲斐守ガ短気不行跡、沙汰ニ及バズ、之二依リ江戸近クニ置マジ、今日ノ所為、堪忍スベシト、²⁶

として、家光より半十郎に、この場合は怒りの気持ちを押さえて我慢するように申し渡されている。半十郎とは伊奈忠治のことである。江戸時代前期の関東郡代で、伊奈忠次の次男である。父である忠次の地方仕法を受け継ぎ、元和七（一六二一）年に利根川を改修して新川を開き、赤堀川の疎通をはかり、寛永十二（一六三五）年に江戸川、寛永十八（一六四一）に権現堂川を開くなど、関宿周辺の河川改修事に尽力した人物である。²⁷一方の忠良の方は、

忠節隠レ無キ半十郎ニ無実ヲ申シカケ、殿中ヲ省ミズ、短気ノ仕方、旁モツテ不届至極也、急度仰セツケラルベク候ドモ、父因幡守無二ノ忠節ヲ尽シ、格別ノ筋目有ルヲ以テ、御宥免遊バサレ、臈州大垣へ所替仰セツケラル……（中略）……忠良畏テ彼地へ移リ、先非ヲ悔イ、忠勤ヲ尽サレケリ、²⁸

として転封の憂き目をみることもなかった。赤穂浪士の例から考えれば、本人は切腹、御家は断絶となるところであろうが、さすがの家光も忠良の父康元が、家光の祖父家康の異父弟ということになれば、

敵しい処断を下すわけにもいかなかったであろう。徳川家三代までは、多くの大名が改易や転封をさせられている。後世に武断政治と呼ばれているが、この逸話を読む限りでは、人と場合によつて情状酌量の余地が残されていたようである。また、当時は、関ヶ原の戦いや大坂の夏の陣・冬の陣など生死の境をくぐり抜けてきた武士たちがいたわけであり、なにか事があれば、刀を抜いてしまふという戦国の荒々しい武士の気風が残つていたこともわかる。さらにこうした状況の中で、武断政治、つまり敵しい政治体制で臨んだ必然性も伺うことができる。

また史跡というより、土地にまつわる伝説が「関宿伝記」には掲載されている。

関宿内町、此所同国国府台総寧寺の旧地という、名主伊右衛門屋敷のあたり本堂なるよし、伊右衛門隣熊野権現社地あり、また町北の方の愛宕の祠あり、皆総寧寺境内の社地とぞ、この祠よりめぐりて、地境の土居の跡として細き長き畑五十間ばかりあり、先年川通堤普請のありけると、町西裏の土を取りけるに白骨あるいは銭など多く掘り出せしよし、此所墓所とみゆ、また向河岸に寺領ありしよし、今に字、寺の内という、内町高六拾石、向河岸四十石、両所にて百石の高という、按るに、内町といえるも、其の頃総寧寺の境内にありけるに、かく名付けるにや、²⁸

と関宿内町の由来について述べている。

四 「関宿伝記」にみる関宿の怪異譚

続いて、「関宿伝記」では関宿城の紹介に移つていく。本丸、二の丸、三の丸、城外とその様子が記されている。

二の丸について、

城代屋鋪一軒、佐倉候御預ノ中、取崩ニナル、家老屋鋪一軒、右同断、塩硝蔵一戸前、²⁹

と記されたあとに次のように記されている。

此郭、尤も物寂しき所也、大木多く打ち繁り、湟（堀）水津々と堪え也、遠浅にして茨蒲（「まこも」と振り仮名があり）、芙蓉等夥しく生滋れり、予幼年の頃聞きしに、足輕某といふ者、秋の薄暮の事なるに、只一人、番所に加番の傍輩来るを待居けるに、大風の音しきりにせしゆえ、戸を少し開けて見ければ、風にはあらで、茨蒲の中を、大いなる蟒蛇（「うわばみ」と振り仮名があり）、屏のほとりに鳩二三羽下り居けるを食はんとして追行けるが、鳩は皆飛び去りぬ、蟒蛇は屏を乗り越して行けるが、頭は大なる犬の頭ほどにて、身は三尺ばかりも廻るべき松の幹ほどにみえしとぞ、³⁰

今泉政隣が幼年の頃に、足輕の一人が二の丸の堀の中に、頭が犬ほどもあり、胴回りが三尺（約九一センチメートル）という大蛇を見たという話を聞き、これを記している。この奇怪な生物を蟒蛇（「うわばみ」と称している。蟒蛇とは強大な蛇の俗称で、大蛇、「おろち」とも言う。林保氏は、「関宿夜話」³¹に大濠に異様ないびき声があるので、城見回りの侍が橋の上から堀の中を見ると、大きな蛇が眠っていたという伝説を紹介している。³²

三の丸にも怪異譚が記されている。

安永八年己亥八月五日、三の丸蔵付中間弥太郎という者、一の蔵脇土居の上に壱人逍遙せしに、この湟の中、大なる音一二度せし故、鯉など躍りたるやと、其の所を心を附いて見居しに、鯉にはあらず、大棟の下あたり長さ六間程なる黒きもの浮べり、頭は蝦蟆（がま）の形のごとく、身は比目魚（ひらめ）などのごとくひそみてみえしよし。察するにひそみたるにはあるまじ、水上へ身の少しみえたるなるべし、目は人の目よりは大きにみえしよし、その節にわかにか毛立し、身体すくむごとく覚えしゆ



図3 河童（『利根川図志』千葉県立関宿城博物館蔵より）

え、早々部屋に逃げ帰りし所、偏身（半身）火のごとく熱出て、夜中、おおいに汗を発し、翌日もなまぐさき氣、鼻に附いて、食事することあたわずという。³⁵

安永八（一七七九）年八月に下層の武家奉公人である中間の弥太郎が、頭は蝦蟇（カマド）というからにはつまり「ひきがえる」の様で、身は「ひらめ」のようにひそんで、目は人の目よりも大きいとする生物を見たということを書いてあるが、何だったのか。

これは河童（カッパ）であろうか。河童は想像上の生物である。一般には、水陸両棲で、四く五歳の子どもくらいの大きさをし、口先がとがり、背には甲羅やうろこがあり、手足には水かきがある。頭には皿と呼ばれる少量の水がはいっているくぼみがあり、その水がはいっているうちは陸上でも力が強く、なくなると死ぬという認識は広く全国に流布されている。河川の淵、沼地などの水界を住み処とする妖怪である。近世には各地の地誌類に広く河童についての記述が見られる。『利根川図志』にも写実的な河童の絵が紹介されている。図3がそれである。凄まじい人身像は見る者を戦慄せしめ

る。特に関宿周辺は、前述のように水と関わりの深い地形環境にある。戦後になってからも現在まで全国に河童譚が残っている。³⁶

また、「関宿伝記」には、

寛保年中のころ、木村葆真軒大夫たりし時、俳諧大いに流行し、江戸より宗匠慶紀逸を招て俳人多く入門せり、五月雨の頃なりしに、葆真軒の宅に会あり、金子逸車、黒川□□吹逸樓等、丑の刻頃帰るとて、佐武門を出、桜町に通行しけるに、大手門扉の上に酸漿（ほおずき）程の光り物一つふと出でけり、皆怪しみ、ぬき足して近づきける内、此光り物漸々に多くなり、三十ばかりになり、上下する事あたかも弄玉（しなだまと振り仮名があり）のごとく、いよいよ怪しく思い、近よりけり、十間程になれる時、川越反右衛門方より夜話の若侍五六輩、門をあけて出る声にて、右の光り物いともなく失けるよし、これ野狐の火なるべき也と、金子逸車語りき。³⁷

と「野狐の火」という現象を記録している。

「関宿伝記」で怪異譚、特に妖怪に関わるものは、以上三話だけである。不思議なことに、今泉政隣は「蟒蛇」と「野狐の火」とする二話については、これらの現象についての知識を持ち、固有名詞として、この現象を判断しているのに対して、三の丸の堀の水の中にひそんでいた「河童」のような物体に対しては、「河童」とは判断していない。今泉政隣は「河童」を知らず、呼称することができなかつたのか。それとも今泉政隣は「河童」の存在を知りながら、「河童」ではない生物と判断していたのかも知れない。今泉政隣がこの「関宿伝記」を書いた時期には、『利根川図志』はまだ世になく、図3のようなグロテスクな画像が、刷り物という方法に乗じて、何匹も世に出回ってはいなかったであろうか。河童が出ているものに一七二二年に刊行されている『和漢三才図会』³⁸などもある。決して安永期（一七七二〜一七八二）に河童の存在が知られていないわけでもない。

また、次のような大氣の不思議な現象も記されている。

安永九庚子年十二月十二日、酉の半刻頃より戌の刻までの間、関宿城中より見渡せば、戌亥の方に当り、少し子の方へふりて、此のごとく赤気あらわる、其色真赤にして、上下共にはつと隈取りたるようにみえたり、長凡そ九尺余、中五寸ばかり、古河よりも同様にみえしよし、虹などの消えるごとく、漸々上下より薄くなりて消えたり、^④

大気の現象、もしくは日食や月食のような現象の類のものではないかと考えられるが、今泉政隣はこのようなことまで記している。

おわりに

また、関宿とは少し地理的に離れるが、将門伝説も「関宿伝記」に記されており、少々長くなるが、紹介したい。

猿嶋郡岩井村に将門を祭りて国王大明神と号す、神主飯塚求馬御朱印拾石の社地あり、しかれども、宮室の跡などといひ伝える事なけれども、又隣村神田山村といえるに、将門の頭を納めし塚ありという、しかれども、何れをそれともしられざりに、近きころ、右村真言宗神田山延命寺といえる一字あり、諸堂社大破におよび、修造の節、礎不足し侍りけるに、すべて此国、近辺石なき国なれば、求め兼ねたる折節、村内にハシ塚といえる塚有けるを、狐の穴よりみるに、石の埋めたるを見出し出して村長談合し、寺修造の事に用ゆなれば、堀うがち、くるしかるまじとて、かかる事に馴し辺田村伝左衛門といへる者に頼みければ、伝左衛門掘らせけるに、方面に刻める石、数多く掘り出しけり、しばらく掘ける内、さというて懐入ぬ、みなみなあはやと言ひけるに伝左衛門下知して、是石櫃也、物こそあらめとてますますあばきけるに、懐込たる土にて埋めければ、砂ふるいにてふるうに、赤銅の環二つ、また馬の齒の如き物八枚、亀

の甲のごとき白骨一つ出ぬ、是、まさしくいにしえより此の村へ将門の首納むといひしにたがわず、すなわちこの塚の事になん侍りけるとて、掘出せるものとも皆延命寺へ納め、右の石をもて本堂は言うに及ばず、諸堂社の礎のごとく出来しとぞ、右の内、齒は一枚ずつ高さ五寸ばかり四方開の図筒の内に、水晶の宝塔の内に納めて右伝左衛門寄進す、八枚の内、壹枚は同人の家にとどむ、この齒を見侍りしに、誠に其のさま鬼の齒ともいふべき、およそ中八分あまり、長さ壹寸七八分も有るべし、かんがえるに、武蔵の国神田明神は将門の体を祭りて、からの明神といえる説もあれど、此村号神田山村なれば、此所の村号によりていえるか、または外に神田の謂われ有りて神号をかくいえるによりて、首を納めし村をもかく名付けるにや、いずれ同じ神田の文字を用いること、平親王の疑いなしといふべき、此赤銅の環はいかなるものともわかちかたきよし、若し甲のものなのんとみて、鍔気みな朽ち果て、赤銅のみ残れるにや、また此近隣の村々を弓田、甲田、矢作、馬立などといえるは、皆兵器等を納めし故か、又は製作せる所かに侍らんと、^⑤

平将門は、承平五（九三五）年、伯父の国香らと争い、常陸・下野・上野の国府を制圧して、新皇と称したが、藤原秀郷、平貞盛らによつて滅ばされた人物である。^⑥ 実は将門伝説はこの地域に広く分布している。^⑦ こうした将門伝説を安永期に書かれた「関宿伝記」からも採集できる。将門伝説がこの地にも根づいており、少なくとも近世中期頃から岩井を中心に語り継がれてきたということができる。

以上、関宿についての地理・伝説・怪異譚について『利根川図志』と「関宿伝記」より紹介をおこなった。柳田国男の著作に『遠野物語』という本がある。陸中遠野郷に伝わる口碑を気品ある文章で記したものであるが、ここにも多くの怪異譚が記されている。また、最近ではこうした妖怪談義も学問の世界で取り上げられるようになった。^⑧ この関宿にも不思議で魅力のある伝説や怪異譚を見つけ出す

ことができた。「関宿版遠野物語」とでも言うことができよう。今後もこのような魅力ある関宿の物語を探していこうと考えている。

〔註〕

- (1) 千葉県高等学校教育研究会歴史部会編新全国歴史散歩シリーズ『千葉県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇六年）、千葉県歴史散歩編集委員会編『千葉歴史散歩五〇コース』（草土文化社、一九七九年）、山本鉦太郎『新利根川図志』（上・下）（崙書房、一九七七〜一九九八）、同『江戸川図志』（崙書房、二〇〇一年）など。
- (2) 鈴木牧之は越後魚沼郡塩沢に生まれ、家は特産の縮の仲買いと質屋を営んでいた。山東京伝と弟の山東京山の好意的協力を得て天保八（一八三七）年に『北越雪譜』を出版している。当時の越後地方の地誌として広く読まれている。鈴木牧之『北越雪譜』（岩波書店、一九三六年）参照。
- (3) 最も有名な通俗地誌で、絵や図に多く入れて、目で見る地誌として、天保七（一八三六）年に、神田雉町の名主である斎藤幸雄、幸孝、幸成（月岑）が三代にわたって三〇有余年をかけて編纂した。長谷川雪旦の挿絵が成功の大きな力になっている。市古夏生・鈴木健一校訂『新訂江戸名所図会』（一九九六年、筑摩書房）として全六巻にまとめられて出版されている。
- (4) 『あびこ版新編利根川図志』（我孫子市教育委員会、一九九〇年）、柳田国男校訂『利根川図志』（岩波書店、一九七八年）、『利根川図志』一〜六（崙書房、一九七八年）、教育社新書『利根川図志』（一九八〇）、『口訳利根川図志』一〜六と別巻（崙書房、一九七八〜一九八二）などがある。本稿では、二世宗旦義知の蔵書印のある本文自体が図版として掲載されている『あびこ版新編利根川図志』を使用している。

- (5) 柳田国男は、岩波文庫『利根川図志』（昭和十三年初版）の解題で本書の出版を安政五年としている。このことについては異論が多い。
- (6) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、二八頁。
- (7) 現在の鬼怒川であるが、その合流地点は現在と安永期では大きく異なっている。
- (8) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、五六頁。史料の表記については、読みやすさに配慮して一部書き直した。
- (9) 築田氏については、千葉県立関宿城博物館企画展図録『戦国の争乱と関宿』、千葉県立関宿城博物館史料集一『築田家文書』（二〇〇二年）などを参照。
- (10) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、五六頁。
- (11) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、五六頁。
- (12) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、五八頁。
- (13) 地表近くの気温が場所によって異なる時、空気の密度の違いによって光線が屈折するため、地上の物体が空中に浮かんで見えたり、遠方の物体が近くに見えたりする現象。（『広辞苑』第五版より）
- (14) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、五八頁。
- (15) 『千葉県歴史資料調査報告書5』（千葉県教育委員会、一九九四年）十一〜十二頁。
- (16) 前掲、『あびこ版新編利根川図志』、五八頁。
- (17) 高野敬仲については、千葉県立関宿城博物館企画展図録『幕末の眼科医高野敬仲―利根川中流域の医療と文化―』（二〇〇四年）が詳しい。
- (18) 『関宿伝記』については、『改訂房総叢書』第四卷（一九五九年）に翻刻されており、これを主に用い、また国立公文書館に所蔵される嘉永四年の写本で校訂した。翻刻された「関宿伝記」は、房総叢書の編者である稲葉隣作の所蔵の写本。また、「杏花園写」とされる写本が国立国会図書館にあり、嘉

永四年の写本が国立公文書館にある。史料の表記については、読みやすさに配慮して一部書き直した。

- (19) 太田南畝は、江戸中期の幕臣、文人、学者で、名は覃、字は子相。号は、四方赤良・蜀山人・杏花園。寛延二(一七四九)年生まれ。父は幕府の御徒太田正智、母利世。年少にして学問をこころざし、松崎觀海・内山賀邸に師事した。十九歳の時に戯れにつくった狂詩文を平賀源内などにすすめられて『寝惚先生文集』と題して出版し、一躍名をあげて以来、江戸の新興の文芸界で活躍することとなった。その後、狂歌をはじめると天明期の爆発的流行のもとで中心の座を占めたが、寛政の改革が始まり一時、文筆活動を廃している。文壇から一時退いたこの時期の寛政五年に関宿伝記を書写したことになる。その翌年には、学問吟味を首席で通り、二年後に支配勘定に昇進している。有能な幕吏であった。晩年は蜀山人という雅号で名声は昔を凌いだという。〔国史大辞典〕(吉川弘文館)「太田南畝」の項参照。
- (20) 船橋随庵については、林保「関宿領水土功績者船橋随庵」(千葉県立関宿城博物館研究報告一号、二号所収)などを参照。
- (21) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二四六頁。奥原謹爾『関宿志』には久世廣明が明和六年九月に大阪城代を命ぜられた旨が記されている。
- (22) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二四七頁。
- (23) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二五七頁。
- (24) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二五八頁。
- (25) 奥原謹爾『関宿志』(関宿町教育委員会、一九七三年)、二二頁。
- (26) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二五八頁。
- (27) 『国史大辞典』(吉川弘文館)「伊奈忠治」の項参照。
- (28) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二五八頁。

- (29) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二八一頁。
- (30) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二六四頁。
- (31) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二六四頁。
- (32) 『日本国語大辞典』(小学館、一九七二年)「蟒蛇」の項参照。
- (33) 「関宿夜話」(新井家文書)、奥原謹爾『関宿志』にも紹介されている。

- (34) 『千葉県歴史資料調査報告書5』(千葉県教育委員会、一九九四年) 十二頁。
- (35) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二六六頁。
- (36) 『日本国語大辞典』(小学館、一九七二年)「河童」の項参照。『日本民俗大辞典』(一九九九年、吉川弘文館)「河童」の項参照。
- (37) 河童譚は全国各地で収集されている。松谷みよ子『現代民話考1』(筑摩書房、二〇〇〇年)参照。
- (38) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二八四頁。
- (39) 江戸時代前期の百科辞典。天地人三部一〇五巻の構成。明の『三才図会』を模して大坂の医者寺島良安が三〇余年をかけて編纂し完成させた。
- (40) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二八二頁。
- (41) 前掲、「関宿伝記」(『改訂房総叢書』第四卷)、二七九頁。
- (42) 福田豊彦『平将門の乱』(岩波書店、一九八一年)、『新装版平将門資料集』(新人物往来社、二〇〇二年)などを参照。
- (43) 村上春樹「関宿付近の将門伝説」(千葉県立関宿城博物館研究報告七号所収)同「岩井の将門伝説」(千葉県立関宿城博物館研究報告八号所収)などを参照。
- (44) 宮田登『妖怪の民俗学』(岩波書店、一九九〇年)、『異界万華鏡―あの世・妖怪・占い―』(国立歴史民俗博物館、二〇〇一年)など参照。

(まつまる・あきひろ 当館客員研究員)